

青山元不動

広東外語外貿大学三年（中国）

聶 熹遠

初めて茶道の世界に入ったということをすっかり感じたのは「青山元不動」の掛け軸を見た時であり、茶道を通じて一番勉強になったのもそれだと思っている。先生の説明で、青山はどんな時にも動かないという意味と知ったが、その時少しづつ動いて正座のもたらし足痛みと戦う私にとって、理解までにはほど遠いものだった。大学入学前に、将来の目標をよく考えて、そして準備をし始めた。一年生の後半は日本語の能力を高めることで、二年生になると、学校所属の喫茶店の営業部長になること、三年時には留学に行くことで、目標を達成するために、沢山の努力は必要だとも分かっている、大学で毎日充実して過ごしているけれども、時々一体何のために努力しているのか疑って迷ったこともある。とにかく計画に沿って頑張ったらいいと思ったが不動という言葉も私には無縁に思えた。

ところが、世界中の人々と同じように、私の運命も新型

コロナウイルスによって変わってしまった。町が閉鎖され、多くのイベントも中止され、そして、海外へ行くことも無理になった。一生懸命準備したのに、試験がなんども中止になり、学校の生活も前と比べて大きく変化し、不便も生じた。ずっと動いているような私でもこの厳しい状況下では、静かにしなくてはならない。しかし、心は、どうにも落ち着かなかった。生活はできるが、もとの道から離れる気がして、イライラしていた。

私はこんな時に、学校の茶室に入って茶道を稽古し始めた。未経験の私にとって、畳の上に正座することや、正しくきれいに歩くことは難しいものだったが、少しずつ上手になった。何回練習しても、正座をすると足が痛くなることは避けられないが、それを我慢できる時間もどんどん長くなった。痛みをなくせるわけではないが、お菓子の中に込められた優しい気持ち、抹茶の香りと味、掛け軸と美しい花で、その痛みも何とかやわらいだ。正座しながら、盆略点前の流れを習得することができたと同時に、少しずつ穏やかな心を得た。

ある日、茶室へ行く途中で、傘を持っていても濡れてしまうほどの雨が激しく降った。体を乾かし、稽古服を着て、茶室に入った瞬間、大雨に乱された心が落ち着いた。午後稽古が終わっても、雨はまだ止んでいなかった。そんな時、雨の音も素晴らしい曲だと急に感じた。茶室の軒、石

の道、ささやかな草、そして雨の中にあるあらゆるものが楽器となり、それらが合わさり、合奏が始まり、素晴らしい音楽となった。

コロナ禍もその激しい雨に似ている。急にきて、大変なことをたくさんもたらして、私達の生活をすっかり変える。こんな時に大切なのは、穏やかな心を保って、乱されず生活の楽しみを探し出すことであろう。学校から外出できないので、前のようにうちへ帰ったり、カラオケや校外のデパートに行ったりすることはもちろんできないが、静かな図書館で、窓外の鳥の囀りを聞きながら、本を読んで、これまで見つけていない世界を知った。また、茶道によって、部屋に飛び込んだ小さな虫にも、命の輝きがあるということをしみじみと実感して、それを前のように殺すのはあまりにも残酷なので、そのままに放っておいてみた。

その日の雨は激しい豪雨であった。厚い雲が流れ去り、夏の陽が差した。雲に隠れていた白雲山が現れて、そのまま動かずに、自然の威厳と柔らかさを持つていた。みんなの力で、コロナの状況も緩和され、色んなイベントも再開した。また前のように忙しくなったが、私は茶道の稽古を続けようと思っている。なぜかという、茶道の哲学で実世界に目を向けると、思いもつかない素晴らしさを見つけられて、自分ももっと包容力があって、柔らかい人になれると思っている。

「青山元不動」の後は「白雲自去来」の句が続く。コロナ禍により社会が大きく変化する中で茶道を通じて、青山のように穏やかな心を保つことの大切さを知った。人生には、よいことや悪いこと、色んなことが雲の流れのように来る。それらに直面した時、穏やかな心をもって、人生を味わって、驚喜に満ちる道に進むのではないか。